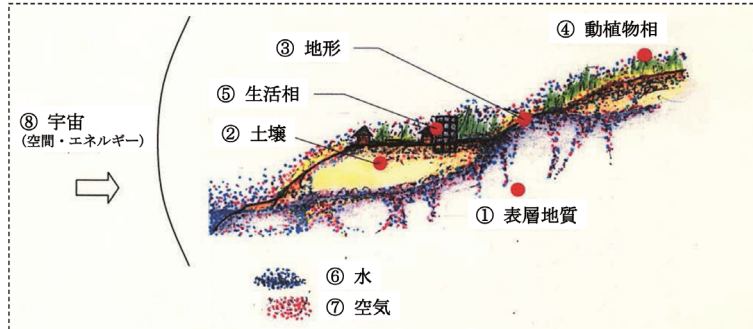


著者プロフィール

田中俊光（たなか・としみつ） 1979年東京都生まれ。2002年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013年3月に独立し株式会社ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011年、「ユニソン フォトコンテスト2011」ファサードガーデン部門ゴールド賞受賞、2014年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014年「第2回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト2017」ファサード部門 ゴールド賞受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー1級、二級建築士。

## 4つの環境分類と8つの環境ファクター



### 1. 大地環境

- ① 表層地質
- ② 土壌
- ③ 地形

### 2. 生物環境

- ④ 動植物相
- ⑤ 生活相

### 3. 気象環境

- ⑥ 水
- ⑦ 空気

### 4. 宇宙環境

- ⑧ 宇宙 (空間・エネルギー)
- 例・太陽エネルギー・月の引力... etc

### 地球環境

矢野智徳氏提供

色々な動植物が生息している「④動植物相」があり、その動植物とはちよつと異なる暮らしをしている人の「⑤生活相」があります。この大きな2つで「2生物環境」を分類していきます。

そして、次が『大地の再生』視点の中でのポイントになってくる「3気象環境」があります。

地上部の風が吹き、そして雨が降ったりする空気と、水の対流の気象環境が、実は大地の中にもしっかりとあるということです。つまり雨が降ることに

前回の号では、「大地の中には、水だけでなく空気もしっかりと流れています。」という話をしましたが、もう少し広い目線での環境について話していきたいと思います。

私たちの住んでいる地球環境は、図のように4つの環境分類と8つの環境ファクターによって見るができます。まずは、そのファクターを紐解いていきたいと思います。

人や生き物が住んでいる日常的な土台である「1大地環境」があります。その大地の環境は骨格を作っている人の皮膚のような「①表層地質」があります。その表層地質が長い年月をかけて侵食されたり風化したり堆積したりしてできる「②土壌」があります。この2つが基本となり、その場所にオリジナルな大地として形を成す「③地形」があります。

環境の基になっている大地の環境に、

よって、土壌の間隙には「⑥水」だけでなく「⑦空気」も通うことになります。

自然環境の中では、山の斜面と尾根と谷から水が湧き出てきます。それは、雨が降ると水と空気が大地に浸み込み、地形の落差によって谷へ水が湧き出てくる現象です。

この現象をさらに細かく見ていくと、大地の中には植物の根が張り巡らされています。その根のすき間に大気圧が掛かると空気が動きだします。それによって押し出される形で、谷側へと水が湧き出てくる、とも言えます。

このメカニズムについて矢野智徳さん（造園家・環境再生士）は、庭の水はけ問題を追及していた時に分かったと言います。土の中で停滞している水を抜くには、土圧の掛かった空気を抜けば、中に溜まっている水が大気圧に押し出されるように抜けていきます。地形の落差から抜ける空気と水の関係は、サイフォンの原理のそのものです。

また、土圧によって締め付けられて根の呼吸がし辛く苦しんでいる植物も、土の中の停滞している空気を抜いてあげれば、中に溜まっている水も大気圧に押し出されるように抜けていきます。

空気と水の流れを改善すれば植物の根の呼吸も再開し元気になるので

今、気象庁が発信しているのは地上の

# 大地の再生

連載

造園家 田中俊光(株)ナインスケッチ代表)



# 水脈を改善し、水脈の担い手である樹木を使う 空間づくりーそれが心地よい住まいに繋がる。



雨が降り、土中に浸み込み土壌間隙を通り地形の落差によって谷間から水がコンコンと湧き出してくる。その目に見える水は、土中の方へ行ったり、また地上へ出たりとする。その過程で水だけでなく空気も通している。

空気と水の流れのことですが、このように地中にも明らかに空気と水が流れています。人間の毛細血管のように水脈となり水と空気を流しています。川として目に見える水の流れは極わずか、地中には植物の根を媒体として水脈が張り巡らされているのです。

大地環境の表層地質、土壌、地形の3

つのファクターは、それぞれ大地の空気と水の動きを大きく左右する密接な関係を持っています。その大地環境と気象環境がうまく相互作用をもたらしながら、有機的な空気と水の循環が生み出されています。その上に、生物や人が呼吸ができる場所として生物環境が作り出されているのです。つまり、地上と地下の空気

と水の循環が、動植物の生活を決定的に裏付けていると言ってもいいのです。

こういう「1 大地環境」「2 生物環境」「3 気象環境」の3つの大きな環境分類が動き続けているのは、「4 宇宙環境」があるからこそだと言えます。宇宙環境は、地球の自転や月の引力など計り知れない「⑧宇宙エネルギー」を発生させています。

環境の世界は、これら4つの環境分類とそれぞれを継ぐ8つの環境ファクターによって、ミクロもマクロも相似形のよ

うに繰り広げられている世界です。こうした考え方を元にして現場を大事に紐解いていくことが重要だと思ふ訳です。

◇ ◇ ◇

さて、こうした考え方に立ってみると、我々の外構エクステリア、造園の空間づくりはどうでしょうか？

現場を見ればコンクリートで覆われた空間で地中の空気と水が滞るような水脈が遮断される空間になってしまっています。人でいうと血管が詰まった状態です。コンクリートを完全否定するわけではありません。コンクリートを使ったら、その分ケアすればいいと思うのです。

どのようにケアをするかですが、まずは水脈を改善し、水脈の担い手である樹木を使う空間づくりをすることです。それが心地よい住まいに繋がると思ふます。

地中の空気と水が通るということは、大気圧が土壌間隙の空気圧、水圧を動かすということです。地上の空気も動くということです。そのため水脈を改善することで地上には心地よい風が流れるのです。人にとっても自ずと心地よい空間を与えてくれるのです。

これからは、大地の環境のことも考慮し、樹々を排除する空間づくりではなくむしろ、樹々の力を借りて大地の呼吸を取り戻さなければならない時代なのです。

## 連載の目的

執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいて、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？一田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に出会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しいです。